

南小だより

minamiurawa-e@saitama-city.ed.jp

令和4年2月1日

2月号

さいたま市立南浦和小学校
電話 048-861-3781



オープンクエスチョン

校長 小野 圭司

現在、本校では教室の廊下等に書きぞめの作品が掲示されています。力強い文字やバランスのとれた文字をはじめ、自分の名前を最後まで丁寧に書いている様子も見られます。自分の精一杯の力を込めて書き切った作品です。今は新型コロナウイルス感染症の「第6波」により、保護者の皆様や地域の皆様の来校が難しくなっている状況のため、子どもたちの頑張りを見ていただけないのがとても残念です。

さて、本校教職員に子どもたちの課題を聞くと、「自分の思いや考えを表現すること」との答えが返ってくる人が多いです。しかし、私が毎日、各教室での授業を参観していると、このことを課題として感じる事が少なく、子どもたちが生き生きと活動している様子が見られます。前述の書きぞめや図工の作品、また今は「3学期のめあて」も教室後方に掲示されていますが、しっかりと自分の思いや考えを表現しているように思います。

では、なぜ本校教職員はこのように感じるのか。本校の子どもたちはじっくりと作品を作ったり、落ち着いて自分の思いや考えを作品としてまとめたりする力が優れているように思います。反面、教員の問い掛けなどに対して堂々と自信をもって自分の意見を述べるようなことに課題があるのかも知れません。

先日、私は「コーチング」について研修を受ける機会があり、その中で「オープンクエスチョン」の重要性を改めて感じました。その反対が「クローズドクエスチョン」です。特に印象に残っているのは、初めの段階の「はい」や「いいえ」で答える「クローズドクエスチョン」から、徐々に答えを限定しない「オープンクエスチョン」へと移行することで、相手が安心感をもちながら自分の心を開放し自発的に物事を考えられるようになるということです。例えば、「お寿司は好き？」と「クローズドクエスチョン」をし、「はい」と答える。次に、「どんなお寿司が好き？」と「オープンクエスチョン」をすれば、「マグロ」などと答える。さらに、「なぜ、マグロが好きなの？」と「オープンクエスチョン」。その際、質問者が「へえ、そうなんだ。」と相づちや共感する態度を見せれば、一層心を開放し、きっと「プリプリとした歯ごたえがいいから。」などと自信をもって答えるのではないかとのことでした。

研修後に、私自身は「クローズドクエスチョン」を本校教職員や子どもたちに多用していないか、と振り返ってみました。確かに質問する側も答える側も「クローズドクエスチョン」の方が質問しやすいし答えやすい。しかし、子どもたちの力を伸ばすためには、「オープンクエスチョン」をするとともに、その答えに対して相づちや共感する態度を示し、子どもたちが堂々と自信をもって自分の意見を述べるようにしていかなければならない、と考えます。やはり私自身が本校教職員に「オープンクエスチョン」をし、教職員も子どもたちに「オープンクエスチョン」をすることで、子どもたちの力を伸ばしてくれることを期待したいです。

ぜひ、保護者の皆様や地域の皆様もこの「オープンクエスチョン」を少し意識してご家族やお知り合いの方と会話（対話）をされてみてはいかがでしょうか。「クローズドクエスチョン」は確かに答えやすいですが、相手としては満足感が少ないような気がします。それは、相手が安心感をもちながら自分の心を開放し自発的に物事を考えられないからではないかと思えます。

終わりになりますが、新型コロナウイルス感染症の「第6波」がやはりまいりました。学校としましては、今後も感染症対策を徹底し子どもたちの健康や安全を守りながら、子どもたちの学びも継続してまいります。ご理解とご協力をどうぞよろしくお願いいたします。